

<ナス褐色斑点病>



葉に、多数の円斑ができる。



病葉の裏面に、白色の病原菌子実体が発生する。



降雨が続くと葉腐れ状となる。

<ナス褐色斑点病>

病原菌：Thanatephorus cucumeris (Frank) Donk
(Rhizoctonia solani Kühn)

1. 症 状

葉では初め淡オリーブ色～灰褐色、水浸状の円斑を多数生じ、急速に融合、拡大して、葉腐れ症状となる。病斑部の組織は乾燥すると破れ、脱落する。病葉は激しく落葉し、その一部は茎枝に巻き付く。果実では、主ながくの周辺から淡褐色、扇状の輪紋斑が拡大し、のち落果する。白色～黄桃色の子実層が、病斑部を除く葉裏面、落病葉が巻き付いた茎枝の周囲、果実病斑の周辺、および落下果実の地面に接した部位に容易に観察される。顕著な葉の破損および落葉により、樹勢が衰弱するので、果実の着生数は少なく、肥大も劣る。

2. 生 態

露地栽培で、夏期～秋期に、低温で降雨が連続すると発生しやすい。湿潤状態が続くと急速に蔓延する。病原菌は主として担子胞子の飛散により伝染する。第一次伝染源など詳しいことは分っていないが、病葉上に形成された子実層は担子胞子形成能力を室温で113日、3℃では512日以上保持する。

3. 防 除

1) 落病葉や病果実は直ちに除去し、焼却する。

2) ジマンダイセン、ダコニール、モレスタン、ロブラール水和剤は本病菌の菌そう生育および担子胞子の発芽を顕著に阻害するので、これら薬剤により他病害との同時防除が可能と思われる。

4. 記 事

本病は1987年(昭和62年)8月、八王子市の露地栽培において、関東地方では初めて発生した。